幼稚園におけるカウンセリングの一方式

（第一・二報）

栄光幼稚園　日名子太郎
愛育研究所　多勢豊次

一、目的（保育効果の向上とカウンセリング）

幼稚園教育の目的を十分に遂行していく為

①一般の園で実施できるという条件の下で、幼稚園における幼児指導に最適な全体計画の方式は何か。

②その実践に際しての問題点は何か。

などの点について考え、その方式を二年間にわたり栄光幼稚園で実際に実施した結果、並びに今後の問題について報告する。

二、カウンセリング方式の試案（下段右上図）

〈基本線〉幼稚園では、幼児のみでなく、必らず保護者のガイダンス、カウンセリングを考えなければならない。そして、特に重要な問題として、集団生活への適応、並びに小学校進学に関することを念頭におくこと。

〈この方式実施の為の準備〉

①問題意識自覚準備体制　②受入準備体制　③信頼獲得体制

④相談受入体制

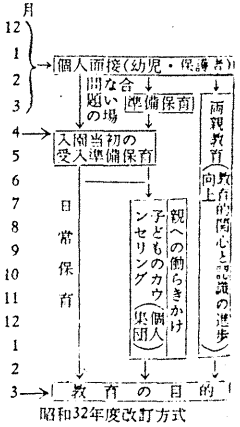
三、効果並びに今後の問題

㋑効果　(1)すべての幼児の集団生活への適応が良好になり、日常保育が容易となった。

(2)親も、幼稚園教育によって子どもの行動が変化していくという事実を認め、より一層協力的となった。

(3)教師の幼児理解の程度、理解の上での諸資料の有効性の認識度などが著しく向上。

(4)以上に伴い、一般保育における幼児のとりあつかい方、指導効果も著るしく向上。



昭和32年度改訂方式

グループ・カウンセリング の実例

ケース	年齢（入園当初）	保育年数	家族	主な徴候	原因（誘因）と考えられるもの	親の問題意識	治療
M（♀）	4才1月	二年保育 年少	父 母 祖母	・社会社を欠く集団への適応悪し	・一人子 ・祖母過保護 ・母神経質	・余りない	集団療法 23回 終結

個人カウンセリング の実例

ケース	年令（入園当初）	保育年数	IQ	家族	主な徴候	原因（誘因）と考えられるもの	親の問題意識	親のカウンセリング	子どもの治療	効果	予後
I（♀）	5才3月	2年	70	祖母 父（養子） 母（養女） 弟	・行動幼稚・身体運動機能著るしくおとる・言語（赤ちゃんこと ば）・集団行動がとれない	・祖母の異常な過保護・素質的なものの・外傷性てんかん（脳波による診断）	・両親とも最初はそれほどでもなかったが次第に事実を認識	・両親と数回にわたり面接・外部施設とも協力て・以後きわめて積極的になり全従て園の指示に従う	グループ治療 16回	・身体運動機能著るし・社会性の発達も著るし・言語発達・食事量増す	一年幼稚園で更に一層の効果を期待

(5)保育の意義が一層明確にされた。

㊁今後の問題

(1)新しい保育技術の分野として、行動観察、諸資料の利用、調査の方法などを、養成課程でも現場でももっと重視する必要がある。

(2)社会性を欠く消極的な子どもに対する準備保育(新入園児中、社会性を欠く、あるいは消極的な幼児、その他についてのウォーミング・アップ的保育をさす)が極めて有効であり、これにより入園期の心理的緊張感を緩和し得ることが認められるが、その回数、方法、時期などについては、一層研究の必要がある。

(3)カウンセリングの効果、特に日常保育における行動の変化を正しく評価するためにはどのようにすべきか。

(4)グループ・カウンセリングの観察結果から、教師間に学級のもつ意義、グループ効果が認識されてきた。しかし学級編成における成員の性別の割合、組の人数などについては今後の研究の必要があろう。

幼児の神仏観念について

——幼児心理に芽生えた神仏観念の調査——

東京・神田寺幼稚園
友松　あきみち
山本　千枝子
小野口　弘子

幼児期の神仏観念の発達が現代人の宗教感覚を基として、どのように発達してゆくかの調査は未だ少なく、宗教立幼稚園の立場から、宗教々育をおこなう上において、重要な意義をもつものである。私達は、その問題についての調査と、分析を質問法によって、東京都内十九園、三〇四名の幼児を対象としておこなった。

質問項目は自然現象について三項目、神観、仏観についてそれぞれ十八項目、釈尊観について三項目を設定し、幼児の答えを出来るだけ詳細に記録した。

この世の中は誰が作ったかについての解答によれば、神が作ったと答えた者が五六%を示しその他、仏、人間、天使、釈尊が一、六%から二、一%程度で、わからないと答えた者が比較的多く二六、七%を示している。

神と答えた者を幼稚園別にあげてみると、当園の四二%、仏教立六七%、キリスト教立八一%、神社立四七%、個人立五〇%となっている。

これによってみると、キリスト教立の場合だけでなく五才児においては一般に、神の観念が少しずつ芽生えてきており、この世の中を神が創造したという考え方は、神の全能と結びついていることが認められる。

年令別に神の観念の芽生えについて、当園の三、四、五才児を対象として比較してみると、三才児では三十七名中六名が神と答え、他はお母さん、先生、みんなどという答が続いている。これは三才児の場合、畏敬を最も身近かな人々に感ずるからであって、神そのものの理解は未だ遠いものであろう。四才児においては、八十名中三十三名が神と答え、三才児に比べはるかに多くなっている。

次に、幼児の直感的な受取り方がどのように発達しているかを比